

TOPICS

「みなみりよく！」創刊のお知らせ

10月に、健康情報誌「みなみりよく！」を創刊致します。
地域医療機関向けの本誌「南窓」とは異なり、主に患者さん向けの内容となっており、健康に関する様々な情報を、写真やイラストを交えてわかりやすくお届けします。

誌名は「大阪みなみの魅力!」、「大阪みなみの力」という意味を込めて「みなみりよく!」とさせていただきます。地域医療機関の皆様にも順次お送り致しますので、待合室などの、患者さんが気軽に読めるような場所へ配架いただけますと幸いです。こちらの健康情報誌「みなみりよく!」は年2回発行の予定です。
皆様もぜひ、ご一読ください。



講演会のお知らせ

第1回大阪南医療連携講演会

「コロナ禍における外科診療」

第1部：コロナ禍における高齢者に優しい食道胃外科診療

18:00~18:30 講師：中森 幹人 先生

第2部：当院における肝胆膵悪性腫瘍に対する外科治療

18:30~19:00 講師：小澤 悟 先生

日時：2021年9月30日(木) 18:00~19:00

参加費：無料

講演方法：オンライン(ZOOM)

当院主催にて医療関係者向けの講演会を開催いたします。
詳細は、同封のチラシをご覧ください。

ZOOM配信のURLはこちら



広報誌「南窓」のご意見・ご感想をお聞かせください

広報誌「南窓」をお読みいただき、誠にありがとうございます。

お客様一人ひとりの声をより良い広報誌作りに活かしてゆきたいと考え、ご意見・ご感想を募集しております。

皆様からのご意見は、今後の改善を進める上で参考にさせていただきます。上記のURL または QRコードよりフォームにアクセスが可能です。

※ご意見・ご感想への返信はいたしておりません。ご了承ください。ご意見全てにはお応え出来ない場合がございます。予めご了承ください。

ご意見・ご感想はこちら ▶ <https://contact.osakaminamihosp.jp/>



診療科 NOW 麻酔科



最適の周術期(術前・術中・術後)医療を提供するために

はやし ひであき
手術部長・医療工学室長 林 英明

短時間作用型の麻酔薬の登場により多様な手術に柔軟に対応

麻酔科が活躍する分野は集中治療・救急医療・ペインクリニック・緩和ケアと多岐に渡りますが、当院における麻酔科医の中心的な仕事は手術のための麻酔です。近年、麻酔薬の改良・開発は著しく、多様な手術に質の高い麻酔を提供しています。

その一例が、短時間作用型の麻酔薬(デス

フルラン・レミフェンタニル)の登場です。これらの麻酔薬は効果の調節性に優れ、投与中止後は速やかに効果が消滅しますので、全身麻酔からの覚醒時間が短縮されます。手術中は、持続的に投与しながら、手術の進行に応じて適切な効果を柔軟に調整することができます。こうした麻酔薬の進化のおかげで、手術中は

患者さんに襲いかかる侵害刺激を十分に遮断し、しかも、手術後は速やかに意識の回復を得ることが容易になりました。かつては困難と考えられていた高齢者や重症患者さんの長時間手術も、日常的に行われるようになってきました。

「超音波ガイド下神経ブロック」を積極的に併用

また、当院の麻酔科では全身麻酔に「超音波ガイド下神経ブロック」を積極的に併用しています。

麻酔の一部として神経ブロックを併用することで、手術中のみならず手術後も良好な鎮痛を得ることができます。さらに、麻薬の投与量を減らす(なくす)ことで、術後に発生する嘔気・嘔吐などの副作用を減らすこともできます。

10年ほど前から超音波ガイド下にブロックを行う手技が臨床応用される機会が増えました。超音波画像を見ながら、標的とする神経の周囲に局所麻酔薬を確実に投与することで、高い効果と安全性を両立させることができます。

神経ブロックを併用する手術の一例として、関節リウマチで足の変形が進んだ患者さんに

対する矯正手術が挙げられます。関節の変形を矯正する手術は術後の痛みが強いことが知られていますが、坐骨神経ブロックを併用することにより、手術後24時間近く痛みを感じることなく過ごしてもらえます。鎮痛に麻薬を使用する場合に比較して、神経ブロックによる鎮痛は、効果・副作用の点ではるかに優れます。



手術を受けられる患者さんの「代理人」としての役割

麻酔科の診療の中心に据える理念は、「麻酔のプロとしてなすべき仕事は、手術を受ける患者さんが最善・最適の治療を受けられるよう、周術期医療の環境を整えることであり、手術における麻酔はその一部に過ぎ

ない」ということです。患者さんに最善・最適のサービスを提供するためには、診療に当たる医療スタッフ全員が一丸となり、チームとして診療に立ち向かわなければなりません。麻酔科医は、チームの一員としてその責任を

担うだけではありません。時には、患者さんの「代理人」として、患者さんの目線で納得できる医療を追求し、その実現をチームに求めてゆく使命を果たさなければならないと考えています。

開業医の先生方と共有したい「禁煙のススメ」と紹介状のこと

周術期医療に関連して、ぜひ開業医の先生方と共有しておきたいことが、禁煙の重要性です。喫煙がもたらすさまざまなリスクは周知の事実ですが、手術・麻酔においてもその問題が認識され、日本麻酔科学会では他の学会とも連携して禁煙を強く啓蒙しています。手術・麻酔に与える喫煙の悪影響を減らすためには8週間の禁煙が望ましく、できれば4週間の禁煙が必要とされています。

可能な限り長期間の禁煙期間を確保し、患者さんにより良い条件で手術に臨んでいただくためには、日頃から診療に当たられている先生方からも、手術の必要性が考えられる患者さんに対して強く禁煙を勧めていただきたい次第です。

開業医の先生方には、もうひとつお願いがあります。先生方からいただく紹介状や診療情報提供書は、患者さんの病歴や病状を

患者サービスの原点は、「自分の肉親なら」という気持ち

手術・麻酔を受けるに当たって、患者さんは強い不安を覚えます。当然のことです。そういう患者さんを前にして、私たちが心がけることは、「自身の親・兄弟・子供に麻酔をする気持ちで患者さんと向き合う」という姿勢です。ご高齢の患者さんならば父母、同年代ならば兄弟や夫・妻、若い患者さんならば子どもです。自身の肉親に麻酔をすることに

なれば、誰しも最善・最適の麻酔をしようと思えますよね。仮に知識や経験が不足していれば、必死に勉強します。医療スタッフにとって日常の出来事であっても、手術・麻酔は患者さんにとって一生に一度かもしれない一大事です。だからこそ、私たちは「自分の肉親なら」という気持ちを心に抱いて患者さんに接したいと考えています。



ワンチーム体制で行う嚥下と口腔機能の強化



「摂食嚥下口腔ケアサポートチームの動画はこちら」

統括診療部長・臨床検査部長
褥瘡対策室長・病床管理センター長

橋本 淳

栄養管理室長 大池 教子

歯科医師

山田 龍男

言語聴覚士

柳川 奈美

他チーム、各診療科との連携も重要

橋本 当チームは、嚥下・口腔機能の低下した患者さんに速やかに介入し、栄養状態や身体障害機能の憎悪の防止と改善、感染予防に努めています。特色は、食べ物を咀嚼し喉から食道へと送り込む一連の動作を切れ目なくサポートするため、摂食嚥下と口腔ケアを分けることなくひとつのチームとして行っています。メンバーは、リンクナース、医師、歯科医師、理学療法士、言語聴覚士、管理栄養士、薬剤師、事務職員など。事務職員は、チームが介入すべき患者さんが入院したことを即座にメンバーに通知し、介入までの時間短縮を図ったり、チーム介入後の成果を管理しています。こういった情報はケアサポートの向上に欠かすことのできない指標となります。私自身はこうした他職種が集まったチーム内の連携と、栄養サポートチーム、褥瘡対策チームといった、栄養に関連する他チーム、各診療科との連携を確実に、より効果的な入院患者さんのケアを目指す要としての役目を重視しています。

今、サポートの対象は脳神経外科、脳血管内科の入院患者さんですが、新型コロナ感染



症収束後は嚥下内視鏡・嚥下造影を有効に活用し活動を病院全体に広げられるように、体制を整えたいと考えています。

口の中の環境を整え 食べる力を引き出す

山田 言語聴覚士と共働で、栄養補給の確保はもちろんのこと、細菌の侵入経路である口の中の環境を整え、誤嚥性肺炎や口腔疾患、合併症予防を促進するのが私の役割です。通常の検査・治療のほか医科歯科連携の強化も図っており、退院される際には、患者さんのかかりつけ歯科医との情報共有や、かかりつけ歯科医のない患者さんには然るべき歯科医院

の紹介など、患者さんが食べることで気力、体力、生命力を高められるよう、常に万全のサポートを目指しています。

柳川 入院患者さんのもとへ最初に訪れ、食べることや飲み込むことに対する検査・評価を行います。そして患者さんの状態を担当医に報告し、能力に応じたりハビリテーションの相談をし、看護師へはケアの助言を行います。栄養士とは食形態の選択について、常に情報を交換し安全な食事を提供できるよう努めています。歯科医師や歯科衛生士とも連絡は密にとり、摂食嚥下機能を極力高められるように活動しています。このチームでの言語聴覚士が果たす役割は多岐にわたり責任は重大ですが、とてもやりがいを感じる部分でもあります。大池 栄養状態の評価、栄養補給の方法や必要栄養量の検討、患者さんへの栄養指導などを通し、一人ひとりの患者さんにとって最もよい栄養の摂り方を提案し実践しています。最初は摂食嚥下ができなかった患者さんが、徐々にゼリーやとろみをつけた食事ができるようになり、普通食が可能になる患者さんもおられて、食べることができるようになった患者さんの嬉しそうな顔を見ることは、私たちにとても大きなやりがいです。